

3-2 想起率から見た小学校児童のびわ湖空間認識

3-2-1 想起率から見た小学校児童の【好むびわ湖空間】認識

想起率を用いて、5小学校の各児童の【好むびわ湖空間】の比較を行なう。【好むびわ湖空間】の想起率を、表 3-1-4、3-1-5、3-2-1 にまとめた。表 3-1-4 からは、各小学校の各連想語についての想起率を比較する。また、表 3-1-5 を用いて、『湖の子』乗船による想起率の変化がわかる。さらに表 3-2-1 より、カテゴリー別に連想語・想起率の違いについて考察を試みる。

表 3-2-1 各小学校カテゴリー別にみた【好むびわ湖空間】における想起率 10%以上の連想語 単位：%

	自然				人間				人工			
	乗船前		乗船後		乗船前		乗船後		乗船前		乗船後	
A (湖南)	水	33.3	水	38.9	釣り	40.7	釣り	24.1	水道水	22.2	船	16.7
	魚	27.8	きれい	33.3	自慢できる	25.9	自慢できる	24.1	滋賀県	14.8	水道水	14.8
	大きい	20.4	大きい	25.9	遊ぶ	16.7			滋賀県		滋賀県	13.0
	きれい	14.8	プランクトン	18.5	遊び(固)	14.8			フロティングスクール		フロティングスクール	11.1
	日本一	11.1	魚	14.8								
			島	14.8								
			鳥	13.0								
			植物(固)	13.0								
		北の方	11.1									
B (湖北)	魚	42.9	魚	46.9	泳ぐ	36.7	泳ぐ	38.8			フロティングスクール	12.2
	水	20.4	きれい	20.4	釣り	20.4	釣り	18.4				
	夏	18.4	夏	14.3	遊ぶ	10.2	楽しい・面白い	18.4				
	きれい	18.4	景色が良い	14.3			食べる	10.2				
			水	12.2								
		生物	12.2									
C (山間部)	大きい	41.5	魚	34.0	釣り	17.0	人	11.3	水道水	15.1	水道水	13.2
	魚	37.7	きれい	26.4	泳ぐ	15.1	釣り	11.3	滋賀県	11.3	フロティングスクール	13.2
	水	20.8	水	22.6							施設・建築物	13.2
	きれい	20.8	大きい	22.6								
	日本一	18.9	日本一	15.1								
	きれいになる	13.2	鳥	13.2								
			プランクトン	13.2								
			島(固有名詞)	13.2								
		島	11.3									
		冷たい	11.3									
D (淀川流)	魚	50.0	魚	40.6	楽しい・面白い	14.1	楽しい・面白い	10.9	施設・建築物	10.9	フロティングスクール	10.9
	生物	28.1	きれい	28.1								
	魚(固有名詞)	21.9	生物	23.4								
	大きい	18.8	大きい	20.3								
			魚(固有名詞)	14.1								
		島(固有名詞)	10.9									
E (環境学習)	水	31.5	水	33.3	泳ぐ	31.5	泳ぐ	38.9	水道水	14.8	フロティングスクール	25.9
	きれい	29.6	きれい	33.3	釣り	22.2	釣り	31.5			水道水	18.5
	魚	24.1	魚	29.6	遊ぶ	16.7	バードウォッチング	14.8				
	鳥	20.4	大きい	22.2	バードウォッチング	14.8	遊ぶ	14.8				
	北の方	18.5	北の方	18.5	遊び(固)	11.1	遊び(固)	11.1				
	大きい	18.5	生物	14.8								
	景色が良い	13.0	船	14.8								
			鳥	11.1								
		日本一	11.1									

想起率50%以上
想起率30~50%

(1) 想起率から見た小学校児童の【好むびわ湖空間】認識の全体的傾向

まず、『湖の子』乗船による、好むびわ湖空間認識の変化の全体的な傾向について考察する。

表 3-1-4 より、『湖の子』に乗船することにより、【好むびわ湖空間】の想起率が全体的に増加していることがわかる。また、表 3-1-5 からは、乗船後[自然カテゴリー]に対する想起率が増加し、[人間カテゴリー]の連想語の想起率は減少傾向にあることがわかる。具体的には[自然カテゴリー]では、「島」「プランクトン」や「きれい」「景色が良い」など『湖の子』の体験から連想される名詞や良い感情を表す形容詞の想起率が増加している。逆に[人間カテゴリー]では、「遊ぶ」や「釣り」など日常生活の中での行動をあらわす連想語の想起率が下がっていた。[人工カテゴリー]では、『湖の子』に直接関係のある、「フローティングスクール」、「透明度調べ」、「プランクトン調査」、「船」などの想起率が上がった。

次に、表 3-2-1 から、カテゴリー別にみた各小学校の特徴について考察する。

[自然カテゴリー]を見ると、湖の南側に位置している A (湖南)・E (環境学習) 小学校では「水」が、B (湖北)・C (山間部)・D (淀川流域) 小学校では「魚」の想起率が高かった。A (湖南)・E (環境学習) 小学校は、湖岸から「水」を見ていることや、生活用水として使っている「水」の印象が、【好むびわ湖空間】イメージとして強いようである。

また、乗船後は各小学校とも「きれい」が 2 番目に高い連想語となっており、『湖の子』が「きれい」を連想させる体験型環境学習であることがわかる。特に、びわ湖の汚い地域に住んでいる A (湖南) 小学校や、びわ湖を直接みる機会の少ない C (山間部)・D (淀川流域) 小学校で、「きれい」の想起率は上がっている。

[人間カテゴリー]では、滋賀県内の A (湖南)・B (湖北)・C (山間部)・E (環境学習) 小学校で「釣り」の想起率が高く、びわ湖における小学生の遊び方として「釣り」が強くイメージされていることが分かる。また、比較的水のきれいな B (湖北)・E (環境学習) 小学校で、「泳ぐ」も乗船前後ともに高い想起率となっており、実際にびわ湖で泳ぐ機会が多いことと関係していると思われる。しかし、C (山間部) 小学校の「泳ぐ」、A (湖南) 小学校の「遊ぶ」「遊び(固有名詞)」は、乗船前は高い想起率があったものの、乗船後は 10% 以下となっていた。乗船前の日常空間体験と『湖の子』の体験とが、結びついて認識されなかったためであると思われる。

びわ湖から遠く離れている D (淀川流域) 小学校では、「楽しい・面白い」が高い想起率を持っていた。乗船前の滋賀県内小学校からは想起されない連想語であることから、D (淀川流域) 小学校児童が、びわ湖をテーマパーク的に、遊びに行くところとしてとらえていると思われる。

[人工カテゴリー]では、A (湖南)・C (山間部)・E (環境学習) 小学校という県の南側に位置する小学校で、「水道水」という記述の想起率が高く、実際に日常生活を支えている「水道水」に対して印象が強いことが伺える。逆に B (湖北) 小学校は姉川の伏流水を生活の中で使い、D (淀川流域) 小学校も井戸水を主に使っていることから、この 2 小

校の「水道水」という記述が少なかったと推測される。

(2) 想起率から見たA(湖南)小学校児童の【好むびわ湖空間】認識

まず表 3-1-5 のA(湖南)小学校をみると、乗船前後で想起率に大きな変動があり、びわ湖空間認識を大きく変化させていることが読み取れる。

これを詳しく見てみると、想起率が8%以上増加した連想語は「プランクトン」「きれい」「島」「植物(固有名詞)」「鳥」の5語であったことがわかる。これらの連想語は、「変わったプランクトンがいて楽しい」と記述があるように、A(湖南)小学校の児童が日常生活では体験することが少ない事柄を表すものである。

逆に想起率が8%以上減少した連想語は「釣り」「遊ぶ」「魚」「遊び(固有名詞)」の4語であった。これらの連想語は「近くて釣りができる」のように、日常生活の中でのびわ湖との接し方を表すものであり、『湖の子』乗船によりそれらの意識が低くなっていることがわかる。

(3) 想起率から見たB(湖北)小学校児童の【好むびわ湖空間】認識

表 3-1-5 のB(湖北)小学校をみると、想起率が増している連想語が多いことがわかる。

具体的に8%以上の増加があった連想語は「楽しい・面白い」「景色が良い」「フローティングスクール」「島(固有名詞)」であった。乗船後の記述に「湖の子にのった時にかんぱんからみたけしきがきれいだった」とあったように、『湖の子』からの景色がきれいで楽しかったことがよくわかる。

逆に想起率が8%以上減少した連想語は「水」だけであった。想起率が減少した連想語が少ないことから、日常空間体験と『湖の子』の体験が、一つの認識として重なり合っていることがわかる。

(4) 想起率から見たC(山間部)小学校児童の【好むびわ湖空間】認識

表 3-1-5 のC(山間部)を見ると、多くの連想語で増減があることがわかる。よって、『湖の子』の体験は、大きくびわ湖空間の認識に影響していたと言えよう。

8%以上増加した連想語は、「鳥」「フローティングスクール」「島(固有名詞)」「施設・建築物」「景色が良い」であった。これは「たくさんの植物、プランクトン、魚、鳥が住んでいる」という記述のように、『湖の子』で実際に見た経験が大きく影響していることがわかる。

一方想起率が8%以上減少した連想語は「大きい」「きれいになる」であり、教科書で習うような連想語であった。『湖の子』に乗船してびわ湖を眺めると、思ったより「大きく」なく「きれい」になっていなかったのかもしれない。

(5) 想起率から見たD(淀川流域)小学校児童の【好むびわ湖空間】認識

表 3-1-5 の D (淀川流域)からは、想起率が増加した連想語が多いことが分かる。

具体的に 8%以上増加した連想語は、「きれい」「鳥(固有名詞)」「フローティングスクール」であり、特に「きれい」は 23.4%の増加と認識を強めていた。「きれい」は乗船前の想起率が 4.7%(表 3-1-4 より)であったことや、「びわ湖は思ったよりもきれいでした」という記述があったことから、『湖の子』に乗船したことによる一番の印象が「きれい」だったことと思われる。

逆に、想起率が 8%以上減少した連想語は、「魚」「施設・建築物」(「琵琶湖博物館」のこと)であり、『湖の子』に乗船する以前に行なった琵琶湖博物館での学習のことが出ていた。

(6) 想起率から見たE(環境学習)小学校児童の【好むびわ湖空間】認識

表 3-1-5 の E (環境学習)を見ると、想起率は全体としてあがっているものの、連想語別では、それほど大きな想起率の増減はなかったようである。

想起率が 8%以上あがった連想語は、「フローティングスクール」「学ぶ」「釣り」であった。「フローティングの勉強などに使える」といった、『湖の子』に関する言葉が多かった。

また 8%以上減少した連想語も「鳥」だけであり、それほどの変化は見られなかった。これらより、『湖の子』に乗船することによって、新しく認識を変えることは、ほとんど無かったとも言えよう。

3-2-2 想起率から見た小学校児童の【嫌うびわ湖空間】認識

次に、【嫌うびわ湖空間】についての各小学校の特徴を考察する。【嫌うびわ湖空間】の想起率は表 3-1-6、3-1-7、3-2-2 にまとめた。

表 3-2-2 各小学校カテゴリー別にみた【好むびわ湖空間】における想起率 10%以上の連想語 単位：%

	乗船前		乗船後		乗船前	乗船後	乗船前	乗船後				
A (湖南)	汚い	70.4	汚い	85.2			ごみ	50.0	ごみ	31.5		
	水	44.4	水	63.0					ごみ(固有名詞)	11.1		
	臭い	42.6	臭い	31.5								
	魚	31.5	ブラックバス・ブルーギル	22.2								
	いない・死んでいる	24.1	魚	20.4								
	植物(固有名詞)	18.5	南の方	18.5								
	ブラックバス・ブルーギル	16.7	いない・死んでいる	14.8								
	減っている	13.0	植物(固有名詞)	11.1								
B(湖北)	汚い	55.1	汚い	65.3	危ない	14.3	危ない	16.3	ごみ	46.9	ごみ	55.1
	水	32.7	水	36.7							ごみ(固有名詞)	12.2
	植物(固有名詞)	24.5	植物(固有名詞)	16.3								
			水に関するその他(固)	12.2								
C (山間部)	汚い	50.9	汚い	47.2	人	11.3			ごみ	43.4	ごみ	32.1
	水	35.8	水	35.8								
	魚	26.4	植物(固有名詞)	18.9								
	赤潮・アオコ	26.4	赤潮・アオコ	15.1								
	プランクトン	17.0	プランクトン	13.2								
	きれいになって欲しい	13.2	ブラックバス・ブルーギル	11.3								
	ブラックバス・ブルーギル	11.3										
	いない・死んでいる	11.3										
D(淀川)	汚い	53.1	汚い	50.0					ごみ	15.6	ごみ	17.2
	水	29.7	水	29.7								
E (環境学)	汚い	72.2	汚い	66.7	泳げない	16.7	危ない	18.5	ごみ	53.7	ごみ	33.3
	水	33.3	水	40.7	人	13.0	泳げない	13.0				
	南の方	22.2	南の方	22.2	危ない	11.1						
	魚	14.8	臭い	14.8								
	いない・死んでいる	11.1	魚	11.1								
減っている	11.1	植物(固有名詞)	11.1									

表 3-1-6 からは、各小学校の各連想語についての想起率を比較する。また、表 3-1-7 を用いて、『湖の子』乗船による想起率の変化がわかる。さらに表 3-2-2 は、連想語の想起率が 10%以上であったものをカテゴリー別に分けた表である。

(1) 想起率から見た小学校児童の【嫌うびわ湖空間】認識の全体的傾向

『湖の子』乗船による、【嫌うびわ湖空間】認識の変化について、まず全体的な傾向について考察する。表 3-1-6 から、【嫌うびわ湖空間】認識は、『湖の子』乗船により低くなっていることがわかる。また表 3-1-7 を見ると、想起率の増加した連想語には「水」「南の方」が挙がっており、「南の方の水が汚い」というような、南北での違いについて触れる記述が多くなっていた。逆に想起率を減少させた連想語は、「ごみ」「魚」「いない・死んでいる」などで、びわ湖の南の方に位置する、A（湖南）・C（山間部）・E（環境学習）小学校が想起率を下げていた。A（湖南）・C（山間部）・E（環境学習）小学校は、「魚の死体がういている」という記述からもわかるように、日常空間の中で「ごみ」や「魚」の「死んでいる」姿を見る機会が多かったようで、乗船前の想起率も高い。しかし、『湖の子』乗船中には、それらの姿を見る機会が少なかったため、乗船後の想起率が下がったと思われる。これは、日常空間での知識と、『湖の子』での体験を、同一の空間として認識できていないことにもなるであろう。

つぎに、表 3-2-2 より、各小学校の【嫌うびわ湖空間】認識の変化の特徴を捉える。

「自然カテゴリー」を見ると、全小学校とも最も高い想起率である連想語は「汚い」であり、2 番目が「水」であることがわかる。その中でも小学校区がびわ湖と接している、A（湖南）・B（湖北）・E（環境学習）小学校では想起率が高くなっており、びわ湖に近い小学校ほど、「汚い」「水」に対する認識が強いことがわかる。

3 番目以降に高い想起率である連想語は各小学校ともばらばらであり、特徴が出るものとなった。例えば A（湖南）小学校は 3 番目に高い想起率だった連想語は、乗船前後とも「臭い」であり、日常的にびわ湖からのいやな匂いと接していることが推測される。また、B（湖北）小学校は「植物（固有名詞）」が挙がって、「もがあしにからまるときがある」という記述のように、具体的には遊ぶときに足に引っかかる藻や水草の記述が多かった。C（山間部）では「赤潮・アオコ」が高い想起率であり、授業中にびわ湖に関して習った言葉が連想されていると思われる。D（淀川流域）では、「汚い」「水」に続く連想語が無く、びわ湖に対するボキャブラリーの貧しさが伺える。最後に E（環境学習）小学校は、「南の方」が乗船前から高い想起率であり、児童がびわ湖が南北で違うということを認識していることがわかる。

次に、「人間カテゴリー」について考察する。これに対する連想語は少なく、A（湖南）・D（淀川流域）小学校では、10%以上の連想語が無かった。ここで想起率が高かった小学校は、びわ湖で直接遊ぶ機会が多い B（湖北）・E（環境学習）小学校であり、ともに「危ない」「泳げない」など、遊びの中から学んだ言葉が出てきている。

最後に「人工カテゴリー」では、どの小学校も「ごみ」の想起率が高い。特に D（淀川

流域) 小学校を除く、県内の4小学校ではこれに対する想起率が高かった。その中では、A(湖南)・C(山間部)・E(環境学習)小学校が『湖の子』に乗船することによって、大幅に想起率を下げた。これは乗船前の知識として、琵琶湖岸がゴミで汚れていることを体験したり、学んでいたことが理由としてあげられると推測できる。そのために、『湖の子』で北側のごみの落ちていないびわ湖を見たことが印象に残り、「ゴミ」の想起率が減少したと思われる。一方想起率が増加したB(湖北)・D(淀川流域)小学校は、B(湖北)が南側のごみの落ちているびわ湖を、D(淀川流域)が新鮮な感覚で見た「ゴミ」の落ちているびわ湖のイメージが残っているようである。

(2) 想起率から見たA(湖南)小学校児童の【嫌うびわ湖空間】認識

表3-1-7のA(湖南)小学校を見ると、大きな想起率の変動があり、【嫌うびわ湖空間】認識を変化させていることがわかる。

想起率が8%以上増えた連想語は「水」「汚い」「南の方」であり、『湖の子』に乗船することによって、「南の方の水が汚い」ことを再認識しているようである。特に「汚い」は乗船後85.2%の児童が連想しており、びわ湖が汚いという意識が非常に高くなっている。

逆に想起率が8%以上減少した連想語は、「ゴミ」「魚」「臭い」「いない・死んでいる」であり、『湖の子』乗船前の想起率が他小学校と比べても高い連想語であった。よって日常的によく感じていたこれらの連想語が、『湖の子』で体験しないうちに認識から離れてしまい、連想されにくくなったと考えられる。

(3) 想起率から見たB(湖北)小学校児童の【嫌うびわ湖空間】認識

表3-1-7より、想起率が増している連想語が多いことがわかる。一人平均連想語想起数も、0.5増加(表3-1-6参照)しており、認識が深まっているようである。

8%以上増加した連想語は「汚い」「水に関するその他(固有名詞)」「(具体的には「波」「海」「川」の記述)」「ゴミ」であった。これらは「びわこのうみがきたないしゴミだらけのところがあって魚がしんでしまっていること」のように、汚れているびわ湖を見た体験から連想されている言葉だと解釈できるので、日常空間ではびわ湖がきれいであると認識していることが読み取れる。

これに対し、想起率が減少した連想語は「植物(固有名詞)」「(足に絡まる「藻」「海草」の記述がほとんど)」だけであった。【好むびわ湖空間】と同様に、日常空間と、『湖の子』による体験が結びついて認識されていることが分かる。

(4) 想起率から見たC(山間部)小学校児童の【嫌うびわ湖空間】認識

表3-1-7を見ると、多くの連想語で想起率が下がっていることがわかる。

そこで想起率が下がった連想語に注目してみると、「魚」「ゴミ」「赤潮・アオコ」「いない・死んでいる」「人」「きれいになって欲しい」らが8%以上減少していた。これらは、び

わ湖の持つ課題であるが、『湖の子』で体験して知ることの出来ない事柄を表す連想語である。例えば「赤潮・アオコ」は乗船日によって発生する日としない日があるし、『湖の子』の活動中には、「魚」が「死んでいる」姿を意識的に見る機会も設けられていない。そのために、これらの連想語の想起率が下がったようである。

(5) 想起率から見たD(淀川流域)小学校児童の【嫌うびわ湖空間】認識

表3-1-7でD(淀川流域)を見ると、想起率に大きな変動がなかったことがわかる。

そこで表3-1-6を見てみると、連想する記述がかなり少なかったことが伺える。例えば「空白・無記入」であった児童が、乗船前31.3%、乗船後26.6%いるように、【嫌うびわ湖空間】から連想することが難しかったことようである。乗船前の知識の少なさが、乗船後もそのままになっている様子から、D(淀川流域)小学校全体としては『湖の子』により認識は多様になっていないように思われる。

(6) 想起率から見たE(環境学習)小学校児童の【嫌うびわ湖空間】認識

表3-1-7のE(環境学習)では、全体として想起率が減少しているものの、連想語別ではあまり大きな変化は見られなかったことがわかる。そのため8%以上増加した連想語はなかった。

また8%以上減少した連想語は「ごみ」「私」だけであった。「ごみ」については、20.4%という大きな減少となっているが、日常空間の中で認識していた「ごみ」を、『湖の子』では見かけなかったために、乗船後の認識では薄れてしまったように思われる。

3-2-3 想起率から見た小学校児童のびわ湖空間認識のまとめ

(1) 想起率から見た小学校児童のびわ湖空間認識の全体的傾向のまとめ

『湖の子』乗船による想起率の変化を、全体的にまとめると、【好むびわ湖空間】認識が多様になって、【嫌うびわ湖空間】認識が薄れることがわかった。これより、『湖の子』が児童に対して、良いびわ湖イメージを与えている環境学習であることがわかる。しかし【好むびわ湖空間】で「遊ぶ」や「釣り」、【嫌うびわ湖空間】で「ごみ」「魚」といった、日常空間をあらゆる連想語の想起率が減少している結果が出た。これらの想起率が減少することは、日常空間と『湖の子』による体験が、乗船後、結びついて認識されていないこととなる。そのことから、『湖の子』の体験と日常生活との関係を理解していない児童が多かったことがわかる。

また各小学校を、それぞれ違う小学校と比較したときの特徴を考察する。

A(湖南)小学校では、「水」「釣り」「水道水」「ごみ」「魚」「汚い」「臭い」といった、生活の中から身につけた知識と思われる連想語の想起率が高かった。

B(湖北)小学校では、「魚」「釣り」「汚い」「水」「植物(足に絡まる藻)」「危ない」といった、遊びの中から想起された連想語が多かった。

C (山間部) 小学校では、「大きい」「魚」「水道水」「ごみ」「汚い」「水」「赤潮・アオコ」といった、学校で学んだ知識と思われる記述が多かった。

D (淀川流域) 小学校では、「楽しい・面白い」「魚(ビワコオオナマズの記述が多かった)」「生物」といった連想語が高い想起率であった。ここからは、びわ湖をテーマパーク的にとらえていることがわかる。しかし、「空白・無記入」の児童が多いことや、連想数の少なさから、あまりびわ湖空間に対する知識が無いことがわかる。

E (環境学習) 小学校では、「水」「釣り」「水道水」「ごみ」「魚」「汚い」と、生活の中から身につけた知識や、「南の方」といった環境学習によって身につけた知識、「危ない」「泳げない」といった遊びの中で身につけた知識を表す連想語の想起率が高かった。

(2) 想起率から見たA(湖南)小学校児童のびわ湖空間認識のまとめ

A(湖南)小学校は、【好むびわ湖空間】【嫌うびわ湖空間】ともに、[自然カテゴリー]では「水」が高い想起率であった。また【好むびわ湖空間】の[人工カテゴリー]では「水道水」が登場している。これらのことや、「びわ湖があるからぼくの家に水がくる」といった記述などからも、他小学校よりも水に対する意識が高いことを読み取ることができる。また連想語数や想起率も他小学校よりも比較的高く、びわ湖に対する認識が多様であることがわかる。

想起率の増減でみると、増減の激しい連想語が多く、『湖の子』に乗船することによって、大きくびわ湖空間認識を変動させていることがわかる。しかし、乗船前には高い想起率であった、「遊ぶ」「遊び(固有名詞)」や「臭い」「魚」などの連想語が、乗船後では想起率が減少していることから、『湖の子』により遊びを始めとする日常生活の知識が想起されにくかったことがわかる。

(3) 想起率から見たB(湖北)小学校児童のびわ湖空間認識のまとめ

B(湖北)小学校は、【好むびわ湖空間】として、「魚」や「夏」「泳ぐ」「釣り」などが出てきている。また【嫌うびわ湖空間】でも、「植物(固有名詞)」「(足に絡まる藻など)」「危ない」などの想起率が高い。これらの連想語に共通していることは、「夏になると毎日泳ぎに行ける」といった記述のように、遊びを通じて連想される言葉である。そのことから、B(湖北)小学校の児童は遊びからびわ湖空間を認識していることがわかる。他小学校と比べると、[自然カテゴリー]については、連想数が少なめであるが、[人間カテゴリー]については遊びを中心とした多くの連想語が出てきているのが特徴である。

また想起率の増減からみると、「楽しい・面白い」「景色が良い」「フローティングスクール」「島(固有名詞)」「汚い」「水に関するその他(固有名詞)」「(具体的には「波」「海」「川」の記述)」「ごみ」と、想起率が増している連想語は多いが、減少したのは「水」「植物(固有名詞)」「(足に絡まる「藻」「海草」の記述がほとんど)」だけであった。このことから、乗船前の知識を乗船後も持ちつづけていることがわかる。

(4) 想起率から見たC(山間部)小学校児童のびわ湖空間認識のまとめ

C(山間部)小学校は、乗船前の【好むびわ湖空間】として「大きい」・「日本一」・「水道水」が、【嫌うびわ湖空間】として「赤潮・アオコ」の想起率が他小学校よりも高かった。これらの連想語は「びわ湖の富栄養化やアカシオなどの問題が発生することが悪いところ」という記述からもわかるように、教科書で習うような事柄である。よってC(山間部)の児童が考えるびわ湖空間は、実体験というよりはむしろ学校から学んで得た情報が多いことがわかる。また、「魚」や「釣り」といった連想語も高い想起率であり、びわ湖に触れる場合には、釣りに出かける機会が多いことが伺える。

また連想語の想起率の増減が大きく、『湖の子』によりびわ湖空間認識がかわったことがわかる。その中でも「鳥」「フローティングスクール」など『湖の子』での体験に関する連想語が、大きく想起率をあげていた。また、「大きい」「赤潮・アオコ」などの学校で身につけた知識に関する連想語が大きく想起率を下げた。これらの連想語の想起率が下がった理由には、『湖の子』のプログラムの中に組み込まれていないために想起されなかったことなどがあげられる。

(5) 想起率から見たD(淀川流域)小学校児童のびわ湖空間認識のまとめ

D(淀川流域)小学校は、【好むびわ湖空間】【嫌うびわ湖空間】ともに、連想数や想起率が低かった。大阪府に住んでいるということが、びわ湖空間に対する認識が下がる原因だと思われる。また、特徴的なのは、【好むびわ湖空間】として「水」が出てこないことである。これは、びわ湖の水(淀川水系)を使わずに井戸水を使ってきた地域に住んでいることが、その理由であると考えられる。

また想起率の増減では、「きれい」が23.4%も増加したことが特徴としてあげられる。しかし、全体的には想起率の変動は小さく、びわ湖空間認識の変化はあまり見られなかった。

(6) 想起率から見たE(環境学習)小学校児童のびわ湖空間認識のまとめ

E(環境学習)小学校は、【好むびわ湖空間】【嫌うびわ湖空間】ともに連想数や想起率が高かった。また記述も、「水」や「水道水」といった生活から連想された言葉や、「泳ぐ」・「遊ぶ」・「危ない」など遊びから連想された言葉、「北の方」・「バードウォッチング」・「南の方」といった学校学習により想起された言葉がバラエティーに出てきており、多様にびわ湖空間を認識していることがわかる。

想起率の増減からみると、「ごみ」が20.4%と大きく減少していた。日常空間の中にあつた「ごみ」を、『湖の子』ではみかけなかったためだと思われる。全体的には、想起率の増減は少なく、『湖の子』によるびわ湖空間認識の変化は小さかった。

3-3 有向グラフから見た小学校児童のびわ湖空間認識

3-3-1 有向グラフから見た小学校児童の【好むびわ湖空間】認識

(1) 有向グラフから見た小学校児童の【好むびわ湖空間】の特徴

図 3-3-1～図 3-3-10 は、有向グラフを用いて作成された、各小学校の【好むびわ湖空間】である。各小学校につき 2 図あり、1 つは乗船前の認識、もう一方は乗船後の認識である。

この図を比較すると、それぞれに特徴があることが分かる。E（環境学習）小学校の有向グラフは多くの連想語を表す円と多くの連想語間の繋がりを表す矢印があり、直感的に【好むびわ湖空間】をいろんな視点から考えていることが分かる。同様に多くの視点から【好むびわ湖空間】捉えているのは A（湖南）と C（山間部）の 2 小学校である。逆にもっとも矢印が少なく、連想語間に繋がりが見られないのは D（淀川流域）小学校であり、【好むびわ湖空間】を詳細に思い描くことが出来ない様子が分かる。B（湖北）小学校の乗船前もそのような傾向がある。連想語間の繋がりが強い A（湖南）・C（山間部）・E（環境学習）の小学校を見比べると、乗船後に「きれい」へ矢印が集中してきていることが分かる。これは『湖の子』によって、<「北の方」が「きれい」> や <「深層水」が「きれい」>、<「水」が「きれい」>、<「島」が「きれい」> など、多様な視点からびわ湖を見つめた結果、「きれい」と答える児童が増えたことを示している。

また、全体的な傾向として、『湖の子』乗船後、[自然カテゴリー]と関連性のある矢印が多く強くなっているのに対して、[人間カテゴリー]のそれは細く少なくなる傾向にある。

(2) 有向グラフから見た A（湖南）小学校児童の【好むびわ湖空間】の特徴

図 3-3-1,3-3-2 を見比べると、乗船前は [人間カテゴリー][人工カテゴリー]からのびている矢印が多かったものの、乗船後は [自然カテゴリー]を中心に連想語間のつながりが強くなっていることがわかる。乗船前の [人間カテゴリー][人工カテゴリー]の連想語は、日常生活の中で身につけた知識や事柄が多かったが、『湖の子』乗船によりそれらの認識が薄くなっている。

(3) 有向グラフから見た B（湖北）小学校児童の【好むびわ湖空間】の特徴

図 3-3-3,3-3-4 を見ると、乗船前は連想語間のつながりが少なかったが、乗船後はつながりが多くなっていることがわかる。特に乗船後では [人間カテゴリー]からのつながりが多くなっており、『湖の子』に乗船することによりびわ湖の良さを再認識しているようである。